

学 位 論 文 要 旨

氏 名 田中修敬

題 目 保育者のズレの認知に基づく効力感向上プログラムの実践開発

近年、幼児教育・保育の質に関する問題が盛んに議論され（e.g., OECD, 2015）、多様な角度からの研究が行われている。日本における保育の質研究は、保育者の意識変容がその質を左右するものとして問われてきた。つまり、保育者が自身の保育を適切に捉え直し、意識を変容させることが必要不可欠であり、振り返りやその中で行われる省察が重要となる。こうした振り返りで省察を深める鍵として、本研究が着目するのが「ズレ」である。ズレを認知することは、子どもとの関わりを豊かなものへと変容させる契機になるだけではない。子どもの新たな一面に驚かされ、保育という営みの尊さや奥深さを感じ取ると同時に、保育者効力感（三木・桜井, 1998）にも繋がり得ると考えられる。そこで本研究では、保育者のズレの認知に基づく効力感向上プログラム（以下、支援プログラム）の開発を目指した。具体的には、保育者のズレの認知の特徴等を明らかにした上で、支援プログラムの開発、実施及び検証等に関わる実証的研究を推進した。

本研究全体は4章構成である。第1章では、先ず、保育実践における保育者のズレの認知について、子ども理解の視点から研究の範囲と位置付けを明確化した。本研究で扱う保育者のズレの認知の意味、保育者効力感との関係を整理した上で、研究の目的と内容構成を示し、用語を整理した。次に、本研究全体に関わる倫理的配慮について記すと共に、本研究の目的、研究対象、及び分析方法を示し、本研究の全体構成を説明した。

第2章では、保育者のズレの認知の特徴に着目し、量的・質的検討を行った。第1節では、ズレに関わるエピソードを収集し、KJ法の手続きに沿って質的に分析した。その結果、保育者が捉えるズレは5つに分類できる可能性が示唆された。第2節では、保育経験年数とズレの認知の特徴について量的分析を行った。その結果、保育者がズレを認知できるかどうかは保育経験年数に関係がないことや、保育経験年数ごとのズレの認知の内容には一定の特徴が認められることが明らかとなった。第3節では、保育者のズレの認知から次の実践に踏み出すまでの意識の変容過程の質的分析を行った。その結果、保育者のズレの認知から次の実践に踏み出すまでの過程には、常に保育者の主体性が存在するということが、保育者はズレの認知を契機として多くの気付きや手立て、喜びを得ていることが明らかとなった。

第3章では、支援プログラムの開発・実施・効果検証を行った。第1節では、認知行動論的な技法を援用し、①子どもとのズレを思い起こす、②ズレの認知のメリットに気付く、③具体的な行動目標を設定する、④「自分にもできる」という見通しや自信を育てる、といったねらいから構成された支援プログラムを開発した。第2節では、保育所に勤務する現職保育者に対して支援プログラムを実施し、保育者効力感と関連する諸要因について量的及び質的に分析した。その結果、実験群と統制群では統計的に明確な有意差は見いだされなかったものの、約半数の保育者には確かな保育者効力感の上昇や維持が認められ、この上昇・維持群の記述内容等について詳細な分析を行った。また、支援プログラムを通して保育者効力感に関連する諸要因の内、保育への自信が向上していたことも示された。

第4章では、第1章から第3章までの研究成果を整理し、得られた知見を総括すると共に、支援プログラムの効果について考察を加え、研究の到達点及び今後の課題と展望を提示した。第1節では、保育実践における保育者のズレの認知の特徴について得られた知見を整理し、考察を加えた。第2節では、支援プログラムによって保育者の力量形成を促す意義について考察した。支援プログラムの効果と課題を示し、保育者効力感を向上させながら実践への意識や行動変容をもたらす要因を明示した。第3節では、本研究における課題を、支援プログラムの改善とデータ収集及び分析上の課題に分けて示した。最後に、支援プログラムによる保育者支援の展望について論じた。